

月影



第36号

ゆき
雪のうちに

ほとけ みな
仏の御名を

となふれば

つ つみ
積もれる罪ぞ

き
やがて消えぬる

ほうねんしやうにん
法然上人



「仏の御名を唱える」というのは、
「南無阿弥陀仏」と、お念仏を唱えること。

日の光に照らされて、
雪がとけていくように。

お念仏によって、
積もった罪がとけていく。

煩惱を持った、至らない私たち衆生に、
「我が名を呼びなさい。

必ず極楽へ往生させます。」
と、誓われた阿弥陀さま。

南無阿弥陀仏とは、

「この身この命、すべて阿弥陀さまに
おまかせいたします。」

という私たちの思い。

そして、阿弥陀さまの誓いに対する
私たちの返事。

お経の話

何が書いてあるの？

じょうどしゅうせいざんごんぎようしき

あかほん

浄土宗 西山勤行式 (赤本) 解説

ほつがんもん

発願文

がんでーしーとう りんみようじゅうじ しんぶてんどう しんぶ

願弟子等。臨命終時。心不顛倒。心不

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

錯乱。心不失念。身心無諸苦痛。身心

訳) どうか私たち仏の弟子が、その臨終の時

をむかえようと、心が傾き乱れ、また心

の統一を失うことがありますように。身

にも心にも苦痛がなく安楽であって、ちよ

うど禅に入った時のように静寂な境地をた

もてますように。阿弥陀仏や菩薩が来迎さ

れましたなら、仏のご本願のままに阿弥陀

仏の極楽へと上品の往生ができますように。

極楽に往生してから、六つの不思議な力を

得て、十方世界をめぐる苦にさいなまれ

ている衆生を救うことができますように。

あの虚空に果てがないように、私のこの願

いにも果てはありません。このように願

いをおこしたなら、ひたすら阿弥陀仏に帰命

いたしましょう。

臨終に当たった心の構えが記されています。

人は極楽へ往生しても、じっとしているの

ではなく、神通力を得て、苦しんでいる人を救

うために、あらゆる世界を探し回っているの

です。

あれこれ仏教用語

じょうひん げひん
上品・下品

品のあるなしのことを、上品（じょうひん）、下品（げひん）と言います。

仏教では、上品（じょうひん）下品（げひん）と読みます。

お経の中で、極楽浄土へ往生を願う人々を、生前の行いや人間性などによって次の九種類に分けています。

上品上生 上品中生 上品下生
中品上生 中品中生 中品下生
下品上生 下品中生 下品下生

上品上生は、この世での行いがとても良い人。

反対に、下品下生は、この世での行いがとても悪い人のこと。

仏事と作法

問）涅槃会（ねはんえ）って、どんな法要ですか？

答）涅槃会とは、お釈迦さまがお亡くなり（ご入滅）になった二月十五日に営まれる法要のことです。

お釈迦さまは八十歳でインド・クシナガラの沙羅双樹のもとで、頭は北、顔は西に向けた状態でご入滅されました。

涅槃とは古代インド語のニルバーナを漢字で音写したものとされます。意味は、あらゆる煩惱（迷い・苦悩・欲望）を滅して心の静まった「さとり」の状態のことを指します。お釈迦さまは、「さとり」を得られてから常に涅槃の境地にあったわけですが、

肉体がある以上、さまざまな苦痛がともないました。

しかし、その肉体の消滅によって、完全な「涅槃」の状態に入られたのです。

涅槃会では、お釈迦さまがお亡くなりになられた時の様子を描いた「涅槃図」の掛け軸を掛けて法要を営みます。

お釈迦さまに関する行事は、涅槃会の他に、
・ 四月八日の花まつり
（お釈迦さまの誕生日）
・ 十二月八日の成道会
（さとりを開かれた日）
があります。

常林院行事予定

一月二日 修正会（初参り）
一月七日 観音講初参り
三月十三日 涅槃会・会計報告
三月二十一日 春彼岸会（予定）
四月八日 花まつり
八月一日～十四日 棚経
八月五日～七日 墓回向
八月十六日 お施餓鬼
八月下旬 地藏盆
九月二十三日 秋彼岸会（予定）
十一月十四日 お十夜会
毎月十七日 観音講

本山永観堂行事予定

四月二十五日～五月一日
法然上人八百回大遠忌
※常林院は五月一日団参
八月一日～三日 緑蔭法話
十一月月上旬 紅葉ライトアップ
十一月九日 西山上人降誕会

雑記抄

いよいよ、法然上人八百回大遠忌の年となりました。四月二十五日から五月一日まで、本山永観堂において大法要が厳修され、全国からたくさんの方々が参拝に来られます。

法然上人は、建暦二年（一一二二年）一月二十五日に八十歳の生涯を閉じられました。法然上人のご生涯は、決して順風満帆なものではありませんでした。

武士の家に生まれ、幼少時の夜討ちによる父の死。浄土宗を開いた後には他宗などからの弾圧。七十五歳の時には四国への流罪など、困難多き人生を送られました。しかし、どんなに厳しく苦

しい状況の中にあっても、「お念仏によって私たちは救われる。」ことを説き続けられた法然上人。その心と教えは、八百年たった現在も、脈々と私たちに受け継がれています。



常林院

平成二十三年二月一日発行
浄土宗西山禅林寺派